講演会の趣旨

大陸以外の島のなかで世界第3位の面積を誇り赤道直下に位置するボルネオ島（カリマンタン島）は、世界で最も豊かな生態系をもつ島の1つであるといわれる。同島では、インドネシアとマレーシアが地続きで国境を接しているが、両国の独立以降の数十年間、それぞれの側の政治経済・住民の生活は独自の歩みをたどってきた。ただ、双方に共通しているのは、木材伐採のために、あるいはパーム油原料基盤のアブラヤシ農園を開発するために、豊かな熱帯林がこの間失われてきたということである。特に1990年代からの20数年間はアブラヤシ農園が急拡大しアブラヤシの生産が増大してきたが、2010年代半ば以降両国からのパーム油輸出が停滞する傾向にあり、ボルネオ島の各地でもそうした世界的な需要制約への対応が求められている。

今回の講演会では、以上のような状況にあるボルネオ島の西寄りの2州、マレーシア・サラワク州、インドネシア西カリマンタン州に焦点を当て、これまで両州の住民たちが、コメ作やアブラヤシ栽培を含む生業の選択をどのような視点に立って行ってきたかについて現地調査に基づいて報告し、将来どのような変化が展望できるかについて聴衆の皆さんとともに考えたい。当日の講演や議論では、昨今のコメ問題に代表されるように国内農業に様々な問題を抱える日本人の視点から、ボルネオの住民の多様な農業・生業がどのように映るかに焦点を当てる。

基調講演

祖田 亮次（大阪公立大学大学院文学研究科・教授）

「グローバル化のなかのボルネオ ―自然環境と生活様式はどう変化してきたか―」

講演要旨／東南アジア島嶼部の中央に位置するボルネオ島は、日本の約2倍の面積を持つ巨大な島で、熱帯雨林に覆われたこの地は、世界最高の生物多様性を持つとされている。熱帯雨林は豊富な森林資源に恵まれ、森に暮らす人々の多くは焼畑陸稲栽培や狩猟・採集活動に従事してきたが、決して外界から隔絶された「自給自足」の生活をしてきたわけではない。コメ栽培を中心に形成されてきた文化は「パディ・カルト」と呼ばれることもあったが、コメに対する執着は必ずしも強いわけではなく、天然ゴムの栽培や換金目的の森林産物採集に労働の重点を移し、コメ栽培を簡単に放棄することも少なからずあった。多様な生業に従事しつつ、その時々の「売れ筋」に敏感に反応し、外部世界の経済とも密接につながっていたのである。近年では、内陸社会においてもアブラヤシ栽培が拡大し、世界商品であるパーム油の生産にも大きく寄与している。本報告では、ボルネオ北西部に位置するマレーシア・サラワク州の「焼畑民」社会を事例に、彼ら／彼女らが経験してきた生業・生活の変化とそれが意味するところについて考えてみたい。

パネルディスカッション

佐久間 香子（東北学院大学地域総合学部・准教授）

「ツバメの巣産業はいかにしてボルネオに浸透したのか ―サラワクと西カリマンタンの生産現場から―」

発表要旨／1714年にボルネオ島南部を訪れたイギリス東インド会社のガレー船・船長ダニエル・ベックマンの記録（1718）によると、当時この地には「世界一の品質のツバメの巣が豊富に」あったという。同島では、ツバメの巣を命がけで採集する人や仲買人などが活躍し、現在では各地で専業・兼業を問わず小規模生産者たちが参入する状況がみられる。本発表では、サラワクと西カリマンタンにおける調査に基づいて、こうした動向の背景を考察する

上原 健太郎（松本大学総合経営学部・専任講師）

「金融から農業を考える ―西カリマンタンの信用組合を事例に―」

発表要旨／小規模農家（小農）の経済活動に対して、信用組合はどのような金融サービスを提供しているのか。また、将来考えられる地域経済の変化に対して信用組合は、どのような役割を担うべきか。本発表では金融機関への調査を通じて農業活動の実態解明を試みる。具体的には、インドネシア西カリマンタン州の信用組合（Credit Union）の活動に着目しながら、それぞれの組織が、どのような設立背景、特徴、意義を持つのかを考えていく。

渡辺 一生（京都大学東南アジア地域研究研究所・連携准教授）

「空から見た『西ボルネオ』の土地利用」

発表要旨／「西ボルネオ（インドネシア西カリマンタン州とマレーシア・サラワク州）」には、アブラヤシが卓越した土地利用が広がっていることは、多くの論文やメディアでも報告されている。本発表では、まず、そのリアルな状況をドローンから撮影した映像でお見せしたい。あわせて、アブラヤシ以外の土地利用が人々の生活圏である集落の中に広がっており、小農の生活を支えている実態についても報告する。